

☒ 授業での活用 ☒ 家庭学習での活用 ☒ パフォーマンステストでの活用 ☐ 小学校 ☒ 中学校 ☐ 高等学校

実践のポイント

日々の指導において、「**言語活動を通した指導**」を**継続的に**行うこと

実践前

- 発音指導に課題があった。
- 言いたいことはあるけれど、すぐに反応して対話することができない。
- 即興的なやり取りへの苦手意識。



実践後

- 対話の継続に向けた、話す内容や言語面（発音、文で詳しく話す）の指導の充実
- 英語でのやり取りについて、成長を実感した。

実践内容

- 実証校数：岐阜市立中学校23校
- 対象人数：3,169名
- 対象学年：第3学年
- アプリ等：LANGX Speaking（株式会社エキメノポリス）
- 研究内容：
 - ・市内全23校が年に2回（6月、11月）、対話型AIによるパフォーマンステストを実施。
 - ・全23校を2グループに分け、Aグループは6月～7月に、Bグループは9月～10月に、7回の対話練習を実施。
 - ・2回のパフォーマンステストのスコアの差から、生徒の話す力の伸びを検証。
 - ・スコアと実際の指導とを分析し、効果的な指導と見直すべき指導の具体の明確化。



「AIの効果的な活用」と「教師の役割の変化」

◆対話型AIの取組と「言語活動を通した指導」との関連

AIとの対話で見られた生徒のつまづき（※1）を指導する。

※1 AIの英語が聞き取れない（スピード、発音）
言いたいことはあるが、すぐに反応して対話することができない

- ・AIの反応を見ながら、表現の方法を変えてみる
- ・学習者用デジタル教科書を活用し、発音の指導をする
- ・生徒とのやり取りを頻繁に行い、即興で伝え合う活動を仕組む

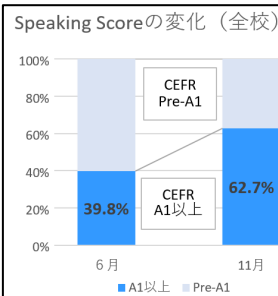
◆学びの多様化学校における実践から

- ・人間ではなくAIだから挑戦できた生徒
- ・個別のブースに入り、イヤホンをすることで取り組めた生徒
- ・丁寧な教材研究と日常のやり取りが、生徒の自己開示につながる

→ 人と関わることが苦手でも、やり取りの学習に取り組むきっかけとなる。新たな学びの選択肢として、提示することができる。

成果検証

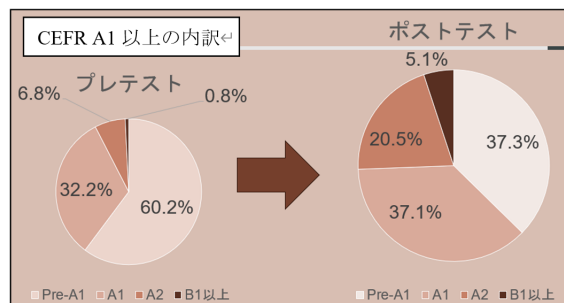
◆生徒の英語力



測定対象：
「話すこと[やり取り]」
(ア)

CEFR A1以上の
生徒の割合：

6月：4割程度
11月：6割越え



CEFR A1以上の内訳に注目すると、A2やB1以上の割合も増加している。ファストラーナーの力を伸ばすことにもつながっている。

◆教師の指導

実践前、生徒を励ます具体的な声掛けについて、既に93.3%の教師が取り組んでいたが、実践を通して60.0%の教師が「さらに声掛けが増えた」と回答している。見取りの視点が広がった結果だと考えられる。

ここが落とし穴！「AIの活用」と「教師の役割」

◆AIとの対話が「指導」につながらないケース

AIとの対話における生徒のつまづきを指導のきっかけにできない。
→AIの英語が早すぎて、発音が良すぎて、何を言っているのか聞き取れない、言いたいことはあるけれど、すぐに反応できない

- ・苦手な生徒には無理にやらせない。
- ・単語やジェスチャーでもよいから反応するように声をかける。

→「できない」を乗り越えさせることが指導、教師の役割である。